（３）②様式第３号－２（報告書）

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。
※必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 大分大学教職大学院
	事業名：【NITS・大分大学教職大学院コラボ研修】 学校組織の自律性と価値を高める校内研修の開発 ～理論枠組を提案し省察を促す研修動画の活用を通して～
	研修等名：【NITS・大分大学教職大学院コラボ研修】 ①「教師の働き方改革の注目点！～働きがいを育む業務改善～」 ②「カリキュラム・マネジメントの極意～カリマネを形骸化させない方法～」 ③「教師のやりがいを生み出す校内研修～脱・仮説―検証～」 ④「学校における校内研修のあり方について～研修動画を受けて～」
	開催日時：令和６年１０月２３日①・１１月２７日②・１２月２５日③ ①～③については 13:10～13:50 オンライン配信＋収録動画配信 令和７年１月２９日④ 9:30～11:00 対面開催 開催場所：大分大学教育学部（大分県大分市旦野原 700 番地） 参加人数（総数）と参加者の属性：158 人（実人数） 内訳、教職大学院教員 17 人、県内指導主事等 141 人

目的：

一昨年度より NITS・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業を活用し、指導主事・社会教育主事向けの研修支援を開始した。その効果もあって、昨年度は教育事務所との研修連携に、今年度は大分県教育センターの調査研究事業（校内研修の在り方検討）に、教職大学院として参画することにつながっていった。今回の申請は、過去２年間の実績を踏まえつつ、NITS から提案のあった「新しい研修観」について協議することも含めて企画を行った。まずは、短時間の質の高い研修動画の制作と配信を通して、県内の指導主事が学びを深めてもらうこと、それを各学校への指導（特に校内研修や授業研究）に生かしてもらうことを企図した。併せて、企画の段階で思いついた「研修動画を見た後の、講師を交えた意見交換会」や「主催者と講師とが質疑応答の形で進行する動画作成」も講師との理解を得ながら進めていった。最後に、研修動画を手がかりに「新しい研修観」について協議する時間を設けた。

内容： ※全体発表の内容をテープ起こしするなど、具体的に記載してください。

第１回の妹尾昌俊氏（(一社)ライフ＆ワーク代表理事）からは、教師の働き方改革について、データに基づき的確に取り組むことの重要性が示された。その的確性を担保する際に、教員の業務改善を Why、What、How で検討すればよいとのヒントが与えられた。「子どもたちのため」というマジックワードに翻弄されないことも加えられた。そうすることで業務の削減が目的化されず、精選に向けた建設的な議論になるということであった。また教育委員会の仕事の仕方（出し方）も学校のあり様に影響することを指導主事に対して伝えていた。校内研修については、型にはまった授業研究からの脱皮が必要で、フラットで豊かなコミュニケーションが生み出される工夫をし、本音の交流による建設的な研修を目指す必要があるだろうと助言した。（1/29 現在 238 回再生）

第２回の安藤知子教授（上越教育大学）からは、カリキュラム・マネジメントについて、そのエッセンスを理解した上で取組を進めないと、形骸化してしまう旨の講話から始まった。カリキュラムを「動かし続ける」ことと「カスタマイズする」ことが肝心である。特に、子どもの実態や保護者・地域の願いに沿う形で柔軟にアレンジできていることが重要なのであって、それこそが子どもの学力保障だと言う。またカリキュラムの概念の転換も必要であり、「子どもの学習経験の総体」と捉え直し、教師は子どもの学習のマネージャーとしての役割を強く意識することが何よりも重要であることが強調された。子どもの育成の共通の理念「学びの地図」を思い描きながら、自由闊達に対話が校内研修で実現されることによって、学校組織が強固になると語られた。（1/29 現在 217 回）

第３回の渡辺貴裕准教授（東京学芸大学）は、学校現場で浸透している校内研修・研究が、ともすれば指導案と授業をもとに語り合われる授業研究、あらかじめ取組成果の仮説が設定され、その正しさを検証する研究発表、となっていることに疑問を呈する。それを理解するために、リフレクション（省察）の概念に着目し、目標管理というやや硬直的な枠組みから解き放たれた、率直な「気づき」の中にこそ本質が潜んでいるのではないか、予定調和ではないリフレクションに私たちは立ち返るべきだと言う。コルトハーヘンの ALACT モデルを題材に、Do、Think、Feel、Want の視点から精緻に振り返ること、また複眼（教師－生徒）で捉え直すことが真の気づきや理解を生み出すと助言した。渡辺氏は「対話型模擬授業検討会」をこのスタイルで実践しており、評価や助言（結論）を導くより、見方や感じ方の交換から参加者全てに新たな気づきがもたらされるよう、検討会をデザインしていると言う。まずは現場で起こっている現実の奥深さや複雑さや、それを解釈しようとする教師の感覚こそ、大

事にしなければならない要素ではないか。「具体・実践」から導かれるものをみんなで出し合って「抽象・理念」を紡いでいくやり方が、今校内研修に求められているということが示された。（1/29 現在 151 回）
　第４回は第１～３回の研修を全て受講した者が参加し、学校における校内研修のあり方を協議した。渡辺氏の授業研究のあり方を下敷きにし、課題が学級経営や特別支援であれば応用可能だ、課題解決が求められるテーマであれば組織的な仮説－検証による改善になるだろう、いずれも経験や価値観の異なる教員同士の関係が結果を左右するため心理的安全性への配慮が欠かせない、などの議論が交わされた。（参加者 10 名）

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載して下さい。

　本研修の視聴期間の設定の関係で、アンケート調査の結果を掲載することはできないが、第１回の研修後の意見交換会と第２回及び第３回の研修後の参加者のつぶやき、最後に実施した「新しい研修観」の協議の際に、参加者からもらった声を中心に成果をまとめる。参加者の総数 158 人のうち、動画視聴対象者数は県内指導主事等の 141 人である。1 月 29 日現在の数字となってしまうが、第１～３回の視聴数（同一の端末はカウントされない）がそれぞれ 238 回、217 回、151 回となっており、職場や自宅、複数の端末での視聴があることが明らかとなっている。また感想として、県教委の事務系職員から「働き方改革の事例紹介を目にすることはあるが、県内の事情を講師に聞いてもらい、アドバイスが得られたことが今回大きな収穫となった」（第１回）、「今回の研修はエッセンスであったが、だからこそシンプルに校内でのカリキュラム・マネジメントのあり方を振り返ることができた」（第２回）、「つぶやきに近い気づきから始めることで、経験の多寡に関わらず誰もがそれぞれの位置で研修に参加できることが分かった」（第３回）、などが寄せられた。「学校の実態を踏まえた校内研修を提案しなければ画餅になってしまう」、「校内研修の成否には教職員間の関係性が大きく影響する。とすれば、研修デザインと有効な問いかけ、ファシリテーター（研究主任）の育成が重要」（第４回）という意見が共感を呼び、教育センターのプログラムにまで話が及ぶほど前のめりの協議となった。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

　校内研修のあり方が形式張ったものとなりがちで、教職員の「やらされ感」が垣間見られる現場の実態から、研修の実効性を高める（研修価値の転換を図る）必要があるという意見は多い。その場合、「教職員・児童生徒の抱える課題に適切に迫ることができるか」、「当事者として課題を共通の目標に置き換えることができるか」、「具体的な取組指標を設定し、組織・個人ともに取り組めるか」、「日常的に情報共有・意見交換ができるか」、「時には組織的にリフレクションでき、組織学習として昇華できるか」、などの視点を押さえる必要がある。これを形式張らずに行うための手法として、「コルトハーヘンの ALACT モデル」の導入などは効果的であろう。当事者として課題の本質に迫り、それに基づき改善の方略をみんなで考え、試行してみて振り返るというプロセスを、組織として受け入れることになるからだ。指導する側と指導される側に分かれない、経験がないから発言がためらわれる空気感ではない、開かれた学びの空間が求められる。配慮が必要であったり、難しかったりする点は、「発言と傾聴」が噛み合い、「学びと気づき」は導き出せても、「だからどういう手立てを講じ、どう振り返り、改善につなぐか」という部分が曖昧になってしまうと、組織学習にはなっていかない。「フラットな関係」や「みんなが当事者」は前提となるが、組織としては見通しを描ける推進役（ファシリテーターやコーチ）の存在は欠かせないだろう。

アイディアや工夫したこと： ※実際の様子がより分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明してください。

　今年度は、大きく３点について、工夫や改善を行った。１つめは妹尾昌俊氏の動画収録から約１か月後の 11 月 20 日の 11:00～12:00 に研修動画を視聴した受講者を交えた意見交換会を実施した。講師以外に本学から 5 名、県教委から 6 名の参加と数的には少なかったが、教育行政の実態についても意見交換しながら、今後の取組の方向性に関する対話ができた。２つめは安藤知子氏の動画収録について、事前の打ち合わせ・内容の擦り合わせを入念に行うことで、「簡潔な趣旨説明」（清國）⇒「イントロダクション」（安藤）⇒「要約・問いかけ」（清國）⇒「問を受けた解説」（安藤）⇒「要約・問いかけ」（清國）⇒・・・という展開案を作成したことだ。視聴者の理解のペースを考慮しながら動画の構成づくりを一緒に行った。３つめは渡辺貴裕氏の収録動画を用いて、大分大学を会場に「新しい研修観」についての協議を行った。
　いずれも、昨年度までの取組では構想しておらず、今年度の企画をしている中で随時思いついたことを、担当講師との打合せの中で合意を形成し、実現したものである。講師側の厚意によって成立したことではあるが、講師の日常的な研修への関心から実現した者と理解している。

11 月 20 日の意見交換会の様子

安藤講師との綿密な事前打合せ